ワンピースの世界に舞い降りた３人の侍

ゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ワンピースの世界に舞い降りた３人の侍

【Ｎコード】
Ｎ１９９６Ｖ

【作者名】
ゆみ

【あらすじ】
万事屋銀ちゃんでは、いつもどうりの日々・いつもどうりの時間を過ごしていた・・・・・・が、突然穴が現れ銀時・新八・神楽がその穴に吸い込まれてしまった！真選組の近藤・土方・沖田も穴に吸い込まれていた！
丁度その頃、鬼兵隊では高杉晋助が突然消えた！？
桂も行方不明と言う噂が・・・・・・・・・・
江戸でこんな噂がたっている頃・・・銀時・桂・高杉は死神に会い、ある真実を聞き、３人は牙をむき、復讐するため死神から力ももら

いワンピースの世界へ行った。
新八・神楽・近藤・土方・沖田は神に会い、神から「3人の獣がワンピースの世界へ舞い降りた。こいつらは危険だ、処理してくれ」とたのまれ、力をもらい・・・・ワンピースの世界へ・・・・・・

夢だと思いたい日は誰にだってある

万事屋銀ちゃんでは、今日も

「神楽〜！！！！お前俺のいちご牛乳飲んだろーーーー！！！！！

「飲んでないアル！銀ちゃんだって私の酢昆布食べたネ！！」

「食ってねぇーよ！！んなもん、誰が食うか！」

「酷いネ！酷すぎるネ！」

「まぁ、落ち着いて下さい。銀さん・神楽ちゃん」

「うるせぇな！！メガネは引っ込んでろっ！！」

「そうアル！メガネは引っ込んであるヨロシ！！」

「ちょっ！メガネ、メガネってあなた達は、僕を何だと思っているんですか！！」

「そりゃぁ、ねぇ決まっているよ」

「決まっているアル」

「決まってんの！」

「あぁそれはな・・・・・・」

その時・・・・・・

「・・・銀さん」

「どうした新八」

「僕の目が節穴じゃなかったら・・・・」

「？」

「・・・・銀さんと神楽ちゃんの後ろに・・・・・・」

銀時と神楽は後ろを向き・・・・・

「おいおい、うそだろぅ・・・・・・」

「嘘ね、これ絶対夢アルヨ」

「そうだよね・・・・」

「そう、そう・・・・・・これは夢だ・・・・目の前にブラックホールみたいな穴があるなんて・・」

「夢に決まって・・・」

その瞬間3人は、穴に吸い込まれた・・・・

その頃鬼兵隊の船では・・・・・・・・・・

「晋助様！何処にいるんすかっ！」

「晋助！」

「晋助様！」

「晋助様！」

今、鬼兵隊の船では高杉晋助が突然消えて大騒ぎだった・・・

また、その頃桂もきえた・・・・

突然高杉・桂が消えたことで真選組はなぜ消えたのか、何処へ行ったのか調査をしていた。

「まさかこの2人が同時に消息をたつとはな・・」

「何かあるな」

「しかも旦那達も消息をたっている・・・・ということは、何かあるに決まってるでさぁ」

「そうだな・・」

『あの総悟でさえ真面目にやっているか・・・いったい何がおこっているんだ』

土方が考えていると突然足元に穴があき・・・・3人はおっこちた。

「いや、突然すぎるだろうーーー!!!!!」

落ちてもなお・・・・突っ込みをする土方十四郎でした。

「でした、じゃねぇーーー!!!」

昔のように手を組むなんて思いもしなかった

銀時は目を覚ました・・・・

「何処だよ、此処」

「知らん」

「やっぱ、お前も知らないか・・・」

「悪かったな俺も今、起きたばかりなんだよ」

「クククッ、俺もだ」

「何だおめぇらもそうだっ・・・・って、何でおめぇらがいるんだよ！銀さん呼んだ覚えねぇぞっ！ズラッ！高杉っ！」

「「あ・・・・・・・・」

「今きずいたのかよ！！」

「まぁ、何はともわれ此処は何処だ」

「ククククッ、ほぉいいのか、俺が此処にいるんだぜ」

「・・・・今はいい」

「・・・そうだな、まず此処は何処なのかだ」

「ククククッ、そうだな」

「その事なら、俺が話そう」

突然、見知らぬ声が銀時達の耳にはいった。

「誰だ」

「死神だ」

「・・・死神っ!?死神ってあのっ!・・・どーしよっ、銀さん壊

れちゃったよ、ズラ・・」

「ズラじゃない！桂だ！・・・・というか、俺もこわれたのか？」

「クククッ、さぁな。・・・・ところで死神さんよぉ・・・俺達に何の用だ」

死神となのるものが突然真面目な顔になった。

これには、銀時達もきずいた。

「・・・・お前達に真実を伝えに来た・・・」

「「「真実？」」」

「そうだ・・・銀時・桂・高杉・・・お前らにとっては複雑だと思うが・・・」

「・・・・で、何だ」

「・・お前らの恩師、吉田松陽を、殺すのを手伝った者がこの世界とは別の世界・・・ワンピースの世界にいる、といったら？」

「「「！」」」

「・・・本当か？」

銀時が言った。

「あぁ」

「・・・それで、手伝った奴らの名前は？」

今度は、高杉が言った。

「海軍・・・1人や2人じゃない、海軍という組織が手伝った」

「・・・・数は？」

今度は、桂が言った。

「数え切れないな」

「そうとう、多いんだな」

「あぁ」

「・・・・・・・許せねぇなぁ・・・・銀時・桂、お前らもそう思うだろぅ」

「あぁ」

さきに、桂が返事をした。

「・・・流石にこれは・・・俺でも許せねぇなぁ・・・」

桂の次に銀時が言った。

「久しぶりに意見があったな、俺はそのワンピースって言う世界に行って海軍って奴らを・・・」

「「「潰す！！！」

「ククククッ、お前らもか」

「あぁ」

「悪いか」

「ククククッ、いいや悪くないさ」

「あっそ、それで死神さんよぉ」

「なんだ、銀時」

「俺らを・・・ワンピースの世界に連れて行ってくれないか？」

「フッ、いいぜ」

「ありがとな」

「別にいいさ・・・それより、あそこの世界は危険だからお前ら3人に力をやる」

「「「本当か！！！」」」

「あぁ、まず銀時はｂｌｅａｃｈの力をやる、それと瞬間記憶能力もやる」

「なんかすげぇな・・・」

「次に桂だが・・・銀時と同じで瞬間記憶能力とＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬの力をやる」

「これはすごい」

「最後に高杉だが・・・瞬間記憶能力とリボーンの力だ」

「ククククッ」

「じゃあ、行ってこい」

「あぁ、ありがとな」

「感謝する」

「ククククッ、そうだな」

「「「行って来る」」」

3人は黒い扉を開け・・・

ワンピースの世界へ行った・・・・

海軍に復讐するために・・・・

神様に頼み事をされるとは思わなかった

その頃、神楽達は・・・・

「新八、此処何処アルカ？」

「さぁ？銀さんもいない見たいですけど・・・」

その時・・・・

ドォーーーン！！！

眼鏡となにかがぶつかった。

「つか、眼鏡って言うな！！」

「イテテテ、何処ですかィ此処は」

「俺が知るか」

「チッ、知らねぇーのかよ、死ね土方コノヤロー」

「総悟テメェ」

「まぁ落ち着け2人とも今は此処が何処なのか知るべきだ」

「そうだな」

「あの～」

「「「？」」」

「いい加減僕から降りてほしいんですけど・・・・」

「「「！」」」

「そうアル」

「すまない新八君！お兄さんを許してほしい！！」

「いや、あんたの弟になった覚えないから・・・」

「まぁ悪かったな」

「いえ」

「よぉ、チャイナ元気そうじゃねぇか」

「だまれヨ気安く話しかけないでほしいアル」

「そういえば、旦那は？」

「わからないアル」

「えっ、一緒にいたんじゃないのか」

「はい、銀さんと一緒に穴に吸い込まれたんですけど・・・」

「目が覚めたときには銀ちゃんはいなかったアル・・・」

「・・・そうか」

「万事屋なら大丈夫だろう」

「・・・そうですよね」

「そうアルヨ」

「新八君」

「はい」

「話を戻すが此処は・・・」

「・・僕達も解りません」

「そうか」

「知りたいなら俺がおしえよう」

声が聞こえるほうを見ると・・・

そこには・・・・

ご飯にマヨネーズをかけている男がいた・・・

土方ではない。

これを見た、神楽・新八・近藤・沖田、そして土方は・・・・

もちろん

「夢か・・・」

「夢に決まってるでさぁ」

「そうですよ、土方さんみたいな人が」

「いるわけないアル」

「「「「だよな〜」」」」

「あの、一緒に食っていいですか」

「「「「・・・・」」」」

「あぁいいぜ」

「どうも」

「「「「・・・・」」」」

「頂きます」

「「「「「・・・・」」」」」

「トシ～なに食べてんの～」

「ん？近藤さんも食うのか」

「かまわねぇよ」

「嫌、食べねえから食べたくないからね」

「そうか」

「つか、まだ食べんのかよ！」

「近藤さん、落ち着いてくだせぇ、それよりも土方さんと食べているそこのオヤジ」

「なんだ」

「此処は何処ですかい」

「天界」

「「「「「・・・・・・」」」」」

「「「「「エェェェーーーー！！！！！」」」」」

「ちょっ、天界！？」

「あぁ」

「僕達死んじゃったんですか！？」

「いいや」

「じゃあ何で天界に俺らが此処にいるんですかい」

「そうアル！！」

男は食べるのをやめ・・・

「俺が呼んだから」

「何で」

「頼みたいことがある」

その男の真剣な表情を見て5人は大切な話だとわかった。

「まず、俺は神だ、神のシン」

「「「「「「・・・・神？」」」」」」

「そっ、神様」

「此処が天界だから神もいるのか」

「あぁ」

「それで神様が俺達に何の頼みごととは・・・」

「ちょっ、トシ」

「・・・・死神が3人の獣をある世界に送り込んだ」

「「「「「死神？」」」」」

「そうだ、君達に頼みたいことは・・死神が送り込んだ、3人の獣を処理してほしいんだ」

「・・・危険なのか」

「あぁ・・凄まじく強い」

「そんなに危険な獣なのか」

「獣と言っても人間だ、けれど凄まじく強い」
「人間・・・」
「死神が送り込んだ世界はワンピースと言ってな・・・・」
「「「「「・・・・・・」」」」」
「頼む」
「俺はいいぜ」
「トシッ！」
「俺もいいですぜ」
「僕も」
「私もいいアルヨ」
「えっ、ちょっみんな」
「近藤さん」
「此処は男をみせるところでっせ」
「あ～もう～、解ったよ俺もやるよ！」
「ありがと、ではその3人とやりやえるよう、幾つか身体能力を上げておく」

「解った」

「じゃ、行って来い」

「「「「「行って来る（きます・アル）」」」」」

神楽・新八・近藤・土方・沖田は白い扉を開き・・・

ワンピースの世界へ・・・・

ワンピースの世界！赤髪海賊団との出会い！

黒い扉を開けたさきは・・・・・海だった。

そのまま、銀時達は、海に落っこちた。

「あのやろぉ～、よりによって海に！」

「次会ったら殺す」

「同感だ」

「さて、如何する高杉・ズラ」

「ズラじゃない桂だ、まずは船だな」

「ククククッ、船か、だったら在れなんかどうだ？」

高杉が指差した方向を見ると・・・

「おい、高杉」

「何だ？」

「俺の意見聞いてくれるか？」

「なんだ、言ってみろ」

「銀さん思うに・・・あれ海賊船じゃね」

「そうだな」

「クククッ、あぁ、そうだろうな」

「あれに乗るの」

「あぁ」

「銀さんやだよ」

「何言ってんだ、海賊ってことは、海軍の敵だぞ」

「！・・・・そうだな、あれに乗ろう・・」

「あぁ」

すると・・・

「お～い」

銀時達が乗ろうとした海賊船から声が。

「大丈夫か～」

「「「・・・・・」」」

「お頭！返事しやせんぜ」

「よし、直ぐに救出しろ！」

「へい！」

ザブーン、飛び込んだ。

「おい、こっち来るぜ」

「そうだな」

「ククククッ、如何する」

「まぁ、いいんじゃね、『救出しろ』とか言ってきたし」

「そうだな」

そして、船の上に・・・・

「大丈夫か！？」

赤髪の男が話しかけてきた。

「あぁ、なんとかな。おい大丈夫か」

「あぁ、ズラ大丈夫だ」

「ククククッ、俺も大丈夫だズラ」
「人が心配さて要るのに・・・ズラズラと・・・俺はズラじゃない桂だ！！！」
「それで、此処って海賊船か？」
「無視をするな！」
「落ち着け」
「ククククッ、そうだぜ」
「・・・・すまない・・」
「いや、いいって。さっきお前が言ったとうり此処は海賊船だ、そして俺はこの赤髪海賊団の船長、シャンクスだ！」
「俺は桂　小太郎だ」
「ククククッ、高杉　晋助だ」
「おれは、さ「白夜叉だ」っ」
「白夜叉？」
「高杉！！」
「お前何を！」

「クククッ、此処ではその方がいいんじゃねぇのか？」

「っ・・・・解った・・・・」

「改めて、俺は白夜叉だ」

「その名前言われたく無いんじゃないか？本名でもないだろう」

「・・・良いんだ、白夜叉と呼んでくれ」

「そうか、解った、３人とも海にいたんだ、医務室へいこう」

医務室・・・

「少し休んでおけ」

「あぁ」

「済まないな」

「クククッ」

「じゃあ、休んで置けよ」

シャンクスは医務室から出て行った。

「お頭」

「みんな・・」

「良いんですか、あいつらを・・」

「良いさ、3人共訳ありだろうしな」

「で、どうすんだ」

「仲間にする！！」

「お頭らしいな」

「そうだな」

「いつか、白夜叉の本当の名前を・・・・お前から聞くぜ」

「そうだな」

「「「「ハハハハハ」」」」

白夜叉・高杉・桂・赤髪海賊団との出会い・・・

白夜叉は本当の名前を教える日が来るか！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1996v/

ワンピースの世界に舞い降りた３人の侍

2011年10月9日05時08分発行